

被爆二世の現状－被爆者の子どもとしての私たちの経験と考へ
丸尾育朗

皆さんこんにちは、私の名前は丸尾育朗です。

私は敗戦から2年後の1947年10月18日、長崎市で生まれました。74才です。私は直接戦争に関わってはいません。

私の母は、24歳の時、爆心地より4.5キロの長崎市で被爆した被爆者です。彼女は膀胱ガンで亡くなりました。

私は高校1年生の時、貧血症で半年間通院しました。

20代になって、新聞などで被爆二世が白血病で亡くなっている事を知り、二世にも影響があるのではないかと思いました。

私は、被爆二世の多くの親しい友人を癌の病気で次々に失っていきました。

私も2020年12月に健診で異常がみつき、2021年2月、精密検査で背中中の血管に癌が転移再発。治療不能で余命1年と言われました。

「緩和治療」を考えましたが、一日でも長く生きてほしいという妻の言葉で抗がん剤による「延命治療」を行う事としました。妻も被爆二世です。そして2022年私は生きて1月を迎える事ができました。

米軍によって投下された原爆は、大量無差別の殺人兵器です。しかも原爆は、戦後生き残った「被爆者」だけでなく、その子である「被爆二世」をも殺し続けています。これこそが「原子爆弾から放出された放射線」の持つ恐ろしさです。その見えない脅威が、被爆77年を経た今日なお続いています。